

長編『兼ちゃん』

東京女子高等師範學校教授 岡田美津

第五「バテ」

吉藏が臺所の爐の前で、晚餐後の煙草をふかしてゐると、兼ちゃんが、

「あたい、大きくなつたらね、繪をかく人になるんだよ。」と言つた。

「繪をかく人？」と父親はきゝかへして「お芳、兼公の言ひ草をきいたかい。」と妻に尋ねた。

お芳は、人指ゆびと親指を濡らして縫糸の尖端を熱り、針のめどに通しておいて、さて、

「繪をかく人つて？ 兼坊ほんとの繪をかくのかい。」といつた。

兼公はとんでもないといふ調子で、

「うーん、ちがふ。あたいね、大きなパンキの桶と大きな刷子と持つてね、梯子の上へのつかつて、白ペンキだの赤ペンキだの青ペンキだの繪をかくんだよ。そして……」

「あゝ、お前、家屋を塗るのか。」と吉藏がいふと、

「あゝ、そして店の看板もかくんだよ。そしてパテの塊でもつて、孔をふさいだりするんだ。あたい、パテ好きだよ。ほら、こゝに持つてらあ。」と兼公は言つて、ツボンのかくしから灰白色のベタ／＼したものを取出した。

「あらいやだ！」とお芳は顔を燈めて「どこから持つて来たの。そんないやなもの持つて、着物が汚れるぢやないか。」
「初ちゃんの、お父ちゃんね、時々初ちゃんにくれるんだよ。初ちゃんの、お父ちゃん指物やだから。」

吉藏が、

「お前、初ちゃんと喧嘩しちまつたつていふぢやないか。また仲がよくなつたのか。」ときくと。

「そうぢやない。あたい初ちゃんがバテを持つてゐたから、すこしおくれつていつたの。」

「あの子は良い子だね。お前にくれたのかい。」とお芳は縫物から顔を上げてほめた。

「呉れたんぢやないよ母ちゃん。あたいが取つてやつたの。」

「そんな事をして、まあ。」とお芳は首を振つて非難した。

「初ちゃん、あたいより大きいよ、母ちゃん。」

「大きいけれど、足がわるいだらう。」

「あたい 打つてやつたら初ちゃん轉んぢやつたからこのバテを取つたんだよ。」と兼公は平気で話した。

吉藏は笑ひ出さうとしたが、妻の眼付を見て急に止めてしまつた。お芳は兼公に對つて、

「お前がもしお父ちゃんからバテを貰つたのに、よその子が来てそれをとつたらいやだらう。」といふと、

「お父ちゃんはバテ持つてないよ。」

吉藏は口に手をあてよくすく／＼笑つてゐた。

お芳は、恐い顔をして吉藏を視て、それから兼坊の方へ向いて、

「ぢやね、もしお父ちゃんがお前に豆板をくれたときに、よその子が来て半分持つてつてしまつたらいやだらう。」

「そうしたら、あたい、その子の鼻を打つてやらあ。」と兼公は勇猛にいつてのけて、窓のところへいつて街燈の點せられ

るのを眺めてゐた。

「だつてもしその子がぶち返してお前を倒しちまつたらどうする。」

「あたゝ打たせないよ。お父ちゃんはこのごろちつとも豆板くれないなあ。」と肩越しに兼公がいつた。

「兼ちゃん、お前だん／＼いけなくなるね。」と母親は嚴かな聲でいひ出すと、父親が、

「だが、この子は良い子だよ。」と小聲で遮つた。

「お前さんは黙つておいでなさい。」と靜に夫に答へておいて「この子は良い子ぢやありませんよ。だから、お前さんはこの子の言ふ事を笑つたり甘やかしたりしないですこしなぐつてでもやればいゝのに。」

「おら、子供をなぐつたことはねい。それに……。」

「お前さんは兼坊をなぐつた事がないからこんなありさまになるんだ。なんでも、したいまゝにさせておくから、この子は悪い事をしてゐると思はないんだもの。子供はすこしは抑へなくてはいけない。」

「そんなら、どうすればいゝんだい。」

「あんな瘦こけた初ちゃんみたような子を兼公がぶつたりバテを横取りしたんだから叱つておやんなさい。」とお芳は聲低くいつた。

兼ちゃんは、鼻の上へバテをとつ付けて、窓のところから戻つて來た。

「お父ちゃん、こら、あたゝの鼻！」と兩親の今までの談話にまるで無頓着に、晴やかにいつた。

吉藏は噴き出してしまつた。お芳は、

「そんなものすぐ脱つておしまい。」と怒鳴つて「お前さんはほんとに呆れたひとだね。この子の悪戯を笑つて見てゐるなんて。お前さん覚えてゐないの、小倉のおかみさんとこの人が話したぢやないか、自分は子供のときに鼻の上へバテを載

せたんでこんなに鼻が碧くなつたんだつて……おとりつていへば、兼公いふ事きかないかい。」

兼公はたいして閉口もせず、窓のところへ戻つていつて母を怒らせたパテを取り去つてこんどはそれを丸めて、たのしみさうに指でキヌウ〜押しつぶしにかゝつた。

「お前さん、あたしの言つた事をしないの。」

吉藏は、なさけなさうに、

「おれには出来ないよ。……千代坊が目を覚ましてもいけないからな。」とそれを頼みの綱にと言ひ足した。

「兼坊を……なぐれといふつもりでもないだんよ。たどね、いつまでも忘れないやうに何とか身にしてみるようにしなくちやいけない。威張つたり、ひとをいぢめたりさせちやいけないから。ね、さうだらう。」

「だつて、どうすればいゝんだ。」

「かうしたらどう？ お前さんがその料理臺のところへ行つて小抽斗をあけてね、今朝あの子につて買つて來た豆板を出して……お前さん聽いてるの？」

「きSてるよ。」

「そして兼公にかう言ふの。お前はおとなしかつたから、土曜日のおたのしみにとこの豆板を買つておいたのだが、ちつともおとなしくないから、一つもやらないつて。」

「それや、ひどいや。」

「そして、その豆板を包んでね、これを横町の初ちゃんのとこへ持つていつて、初ちゃんにやつてそしてパテも返しておSびとSぶの。」

「それや、ひどいや。」

「そうすると、兼公は自分より弱いものを打つたりしちや悪いつて事が分るんだよ。お前さんだつて大きな子供が兼公を打つたら腹が立つだらう。」

「それやそうさ。……だがな、兼坊はあんなに豆板が好きなんだから……」

「まあ、この人は兼公のためつてことを思はないのかね。それだか 我儘になるんだよ。お月様が欲しいつて泣けばお前さん取つてやる氣なんだらう。」

「お前の言ふことは尤なんだらうよ。だが、おれにや出来ぬい事をしろつていふんだからな。豆板を半分初ちやんとこへ持つて行けつて言つたらいけないかい。」

お芳は頑として、

「そんな事は駄目く。おい、兼坊。」と悴を呼んで、

「お父ちやんが用があるつて……さ、お前さん……」

吉藏は大きな溜息を一つ吐いて、起ち上り、料理臺の抽斗のどこへ行つて豆板の包みを持つて來た。

兼公は、何の頓着もなく、

「お父ちやん、あたゐい、パテより豆板の方が好き。」

父親は、歎願するように母親の顔を見たが、母親の決心は巖のやうに堅かつた。彼女は再び針を手にしてゐたものゝ父子二人の様子に眼を配つてゐた。

吉藏は、當惑さうに、

「兼公、何故あんな弱い初ちやんを打つたんだい。」

「パテがすこし欲しかつたら。」

「さうか。」と吉藏は言つたまゝ暫時黙つてゐて「打つたりして悪るかつたと思ふだらう。」

「うゝん。あたゐ、バテを取つたもの。」

「悪るかつたと思 なければいけない。」

「どうして? お父ちゃん。」

「初ちゃん泣いたらう。」

「あゝ、泣いた。」

吉藏はこの場を何とかして貰はうとお芳の方を眺めるけれど、お芳は精出して縫つてゐた。

「それでな。」と父親は途切れ／＼に 母ちゃんも、父ちゃんも、お前が初ちゃんに るい事をしたんで怒つてるんだぜ。」
初ちゃんのやうな子をぶつなんで卑怯なもの。」

兼公の顔は心配さうになつて來た。

父親は、

「母ちゃんが： 母ちゃんが言ふにはな……。」

「お前さん、しつかりおしよ。」とお芳は警告した。

「母ちゃんも父ちゃんもな、今日はお前に豆板をやるまいつていつてるんだ。」

兼公の下唇は深へながら突き出て來た。

「でな……お前、豆板を初ちゃんにやつてそしてバテも返してくるんだ……そして……そして……お芳……おれあ……も
う言へな。」

父親の言つた事が、兼公にのみこめるまでには一二秒かゝたが……いよ／＼解つてしまふと、兼公は低い聲を揚げて泣

き出し涙をボタ／＼落し初めた。

吉藏は兼公を抱き上げやうとしたが、お芳はそれを遮つて、物靜かに

「さ、帽子、被つてね兼公、豆板とパテとを初ちやんとこへ持つておいで。まだ日は暮れないから。」と窓の外を見やりながら付け足した。

「あたい、初ちやんに豆板やるのいや。」と兼公は泣いた。

「言ひ付けられた通りにするんだよ。」と母親は穩かに、優しく答へた。「お前、泣蟲ぢやないだらう。」といひ／＼涙を拭いてやつて「お前、男になるんだつたね。お前が泣いてるのを見ると初ちや が何ていふだらう、エ、兼坊。」

お芳の言葉は思ふ的にあたつた……兼公は忽ち泣くのを止めた。息だけはまだせか／＼させてゐたが、帽子で涙をふいてそれをすぐ頭にかぶつた。

「あたい、豆板とそれからパテもやるの。」と彼は衰れ氣な聲で尋ねた。

「あゝそうだよ。そして打つたりして御免よつていふの。初ちやんは、お前のやうな丈夫な強い子でないんだから……よくそれを覚えておいで。お前が初ちやんみたやうに足が悪るかつたりすると、お父ちゃんも、母ちゃんも心配するからね。さ早くいつて豆板とパテを渡しておいで、そして仲がよくなるやうにおしね。」

「あたい、仲よくなりたくないんだ。行きたかないや。」と兼公は、反抗氣味に答へた。

「初ちやんが恐いのかい。」とお芳が尋ねた。

「またもや、うまく矢が當つた。」

「恐いもんか。行つてくる。」

「偉い！」と今まで黙りこんで暗い顔をしてゐた吉藏が怒鳴つた。「お前が恐がるもんかなあ。」

兼公は、何だか大勇者にでもなつたやうな氣がした。威張つた態度で無言のまゝに、豆板の包み（母親が針箱から細紐を探してしれかり括つてくれた）を持つて出掛けていつた。

吉藏は、氣遣はしさうに妻を見た。

お芳は、また針仕事にかゝてゐたが、指先はさう早く動かなかつた。夫婦はたび／＼時計を眺めた。

「五分位しかかゝるまいに。すこし酷くやりすぎたんぢやないかな」と吉藏が言ひ出した。

お芳は返辭をしなかつた。そして十分ばかり過ぎると「兼坊はあの通りするんだらうかな」と吉藏がまた話しかけた。

「するともさ。」とお芳は、暢氣な風を装つて答へた。

「おら、一所にいつてやればよかつたな。」

お芳は黙々として六針程縫つたが、

「お前さん、一寸いつてあの子が何してるか見て來たらどう。」と言つた。

「そうしよう……どうだらうなお芳、戸外へ出たついでに、すこし豆板を買つてやつちや。」と遠慮がちに伺ひを立てた。

お芳は縫物から顔をあげて、やさしく、

「買つたらいゝでせう。坊も解つたらしいから。あの子は子供にしちや中々自尊心がつかよいな。」

「あゝ、うちの兼坊みたいな良い子はめつたに無いや。」と妻にうなづいて見せて出ていつた。

二十分程経つてから父子が揃つて戻つて來た。二人とも大にこゝの態だつた。

「兼公が初ちやんと別れないで困つたよ。」と吉藏が微笑み／＼話した。

「おや、さうだつたの。」とお芳も上機嫌で「兼ちやん、お前豆板とパテとを初ちやんに渡したの。」

「あゝ渡した。」

すると母親は兼坊を抱き上げて可愛がりながら、

「お前さん、すこし豆板をやつて下さい。」といつた。

吉藏は大喜悅で、たつぷりと豆板をやつたから、兼公は、心のゆくかぎりお腹へつめこんだ。

「お前どうしてあんなにいつまでも初ちやんとこにゐたの。」とお芳は愉快さうに訊いた。

「初ちやんね、あたいにパテの大きな塊をくれたよ。」と兼公はオレンチ程の大きさのを出して見せた。

「あら！」といひながらお芳は厭さを見せまいと努めた

「そしてね、あたひ、初ちやんと豆板たべたの。」と兼公が言ひ足した。